取立て助詞「ダケ・バカリ・シカ」の一考察

——中国語の副詞「只」との対照——

呉　　雅　琴

1. はじめに

寺村秀夫（1981）は，外国人が犯しがちな誤りの一つとして次の例をあげている。

(1)　*少しだけ日本語が分かりますから，大変不便です。

この場合，日本人なら，(2)のように言うのが普通だろう。

(2)　少ししか日本語が分かりませんから，大変不便です。

しかし，(1)・(2)の前半部分を独立させてみると，

(3)　少しだけ日本語が分かります。

(4)　少ししか日本語が分かりません。

(3)・(4)どちらも日本語の分かる程度が少ないということを述べている点では同じだが，一方は<大変不便です>とつながり，一方はつながらないのはなぜだろう。それは，日本語が分かる程度が少しだという事実に対する話し手の見方にどこか違いがあるからだろう。

ところで，(3)・(4)を中国語になおしてみると，どちらも<只懂一點児日語>となる。これは<大変不便です>にあたる中国語<很不方便>と自然につながる。

寺村（1981）は，「シカ……（ナイ）」は一般にその文を包む文脈，あるいは状況が，話し手から見て，予想・期待に反する，つまり，否定的文脈の場合に選ばれると説明している。そのことから，上の日中対照を考えてみると，中国語の「只」は，日本語の「シカ……ナイ」と同じように否定的な文脈を予想させると言えそうである。しかし，<只有他走了(彼だけが帰ってしまった。)「新中」p. 131>のような例から考えると，中国語の「只」は日本語の「ダケ」とも対応しているようである。このため，日本語がかなり上達した中国語系の学習者でも(1)のような間違いを犯しがちである。

本稿では，日本語の「ダケ・シカ」と「バカリ」の意味・用法について，「取立て助詞」の機能という側面から(1)のような誤用例を分析し，また，これらに意味の上では対応する中国語の副詞「只」との異同について明らかにすることを目的としている。

2. 取立て助詞の範囲と機能について

取立て助詞は，宮田幸一（1948）によって，これらの助詞がともに「文または句の一部を特に取立てて，その部分をそれぞれの特別の意味において強調する」という定義のもとに命名された。寺村（1981）は，取立て助詞の範囲をさらに広げ，従来「係助詞」と「副助詞」と呼ばれてきたものを一括して，取立て助詞とした。また，取立て助詞の機能につ

いて，寺村（1985）は，「取立て助詞のついた文は，客観的な事柄についての情報に加えて，特に何事かを強く聞き手に印象づけたいという話し手の意図を伝える」と指摘している。

こうした取立て助詞の機能が(1)のような誤用例にどのようにかかわっていくのだろう．例えば，「ダケ・バカリ・シカ」の三語は程度や限定を示すという意味の面では類似している。しかし，話し手の「何事かを強く聞き手に印象づけたい」という取立ての機能においては，この三語の用法はかならずしも一致しているとはかぎらない。高橋太郎(1983 b）は，このような話し手の主観について「評価」という概念を導入し，取立て助詞に属する「グライ・ナド」には，話し手の「否定的な評価」をつけくわえる用法があると説明している。ここで考えたいのは，この「グライ・ナド」にある「評価」は「ダケ・バカリ・シカ」の場合にも言えるかどうか，また言えるとしたら，その内容はどういうふうになるだろうかということである。

3. 「ダケ，バカリ，シカ」における「評価」

(5)　少し日本語が分かります。

(6)　少し<u>ばかり</u>日本語がわかります。

(3)・(4)・(6)はそれぞれ(5)と同じ事柄について異なった述べ方をしているが，事柄としては(5)と同じである。つまり，(3)・(4)・(5)・(6)の四文は，「分かっている日本語が少しである」という事柄の面においては共通するが，話し手がこの事柄について違う評価をしているために，(3)・(4)・(6)のように表現が違ってくる。(3)・(6)にある「ダケ」「バカリ」はいずれも話し手が自分のもっている日本語の力に対して，「少しだけれども，少しは分かる」という評価を示している。しかし，(4)の場合は，自分が少し分かる日本語に対する「ほとんど役に立たない」という話し手の評価を示している。このため，(2)は言えるが，(1)はおかしい文になる。ここで，もし，(1)が言えるとしたら，どんな場合であるかについて考えてみると，「少し日本語が分かります」というコトが話し手にとって好ましくない場合が考えられるだろう。例えば，「日本語が分からなければ，もっと速く外国の生活に慣れることができるはずなのに，少しだけ日本語が分かりますから，かえって大変不便です。」といった場合である。しかし，これは特例であり，特殊の場面や話し手の説明を必要とする。本稿では，特別の場面を設定しなくても話し手から十分に聞き手に伝わる評価の問題に絞りたい。

また，本稿では，基本的には高橋の「評価」の概念規定に従い，同一のコトに対して，話し手の好む感情を表わす表現を「＋評価」，その反対を「－評価」と呼ぶことにする。従って，高橋の言う「否定的な評価」が「－評価」になる。

次に，先に述べた「ダケ・バカリ・シカ」にある「評価」の内容はすべて同じかどうかについて考える。

(7)　a．今年の学位論文審査に五人合格した。

　　b．今年の学位論文審査に五人<u>も</u>合格した。

　　c．今年の学位論文審査に五人<u>だけ</u>合格した。

d．今年の学位論文審査に五人ばかり合格した。

e．今年の学位論文審査に五人しか合格しなかった。

(7) a の客観的な事実描写に対して，(7) b は「話し手が五人よりも少ない学生が合格することを予想していたが，実際には予想よりも多い学生が合格した」ということを表わしている。(7) c・e は「話し手は五人よりも多くの学生が合格することを予想していたが，予想したほどの人数の学生は合格しなかった。」という残念な気持ち，即ち，「－評価」を表わしている。これに対して，(7) d の場合は，話し手はとくに期待する気持ちを持っていないようである。ただ合格者数をはっきりとは言わず，だいたい五人ぐらいだといっている。

同じ「ダケ・バカリ・シカ」にしても，(7) c・d・e にある話し手のコトに対する「評価」の内容は (3)・(4)・(6) の場合と違っている。「ダケ・バカリ・シカ」はどのような意味を示すか，どのように区別されるかを考えるために，話し手のコトに対する「評価」を「程度」と「限定」という二つの側面から観察する。「ダケ・バカリ・シカ」が，数量のような幅を持った範囲の語に付く場合を「程度」とし，名詞や代名詞に付いて，その範囲をそれと限る場合に「限定」とする。

3.1 「程度」を表わす場合

A．数詞につく場合

(7)の例から分かるように，「ダケ・シカ」は話し手の数量に対する「－評価」を示し，「バカリ」は「評価」に関係なく「数量をぼやかす」働きをしている。

(8) 返事をよこしたのは一カ月分滞納した三名だけで，あとは何とも言ってこなかった。(「基日２」p. 254)

(9) この四人の兵隊サンに，銃が二挺しかないのには，どうにも驚いてしまいました。(「たた」p. 220)

(10) この本を十日ばかりおかりしたいと思います。(「外例」p. 815)

B．数詞以外の数量の幅をもつ語につく場合

例えば，(3)・(4)・(6) のような数量概念に基づく副詞につく場合，「ダケ・バカリ」は話し手の「＋評価」を，「シカ」は「－評価」を示している。

(11) a．お金が少しありますから，おごりましょう。

b．お金が少しだけありますから，おごりましょう。

c．お金が少しばかりありますから，おごりましょう。

*d．お金が少ししかありませんから，おごりましょう。

(11) a の客観的な事実の描写に対して，(11) b・c は話し手が自分の持っている少しのお金に対して，「少ないけれど，一応持っている」という「＋評価」を示している。これに対して，(11) d は話し手が自分の持っているお金に「ほとんどお金を持っていないと言ってもいいぐらい」という一種の「－評価」を表わしている。そこで，「おごりましょう」とのつながりが難しく，(11) d は成立しにくくなる。

高橋（1983 b）は，「バカリ」には，「ほんのわずかだが」という話し手の評価がつけくわえられる用法があると述べている。この「ほんのわずかだが」という評価の内容が話し手自身のことについて述べるときは，しばしば「謙遜」や「語気をやわらかくする」感じ

がする。本稿では，これを「＋評価」とする。それでは，他人のことについて述べるときも，この評価の内容はおなじだろうか。

(12) 少しだけ日本語ができると思って，いい気になっている。

(13) この若い衆はわずかばかりの口髭を剃りのこし，素通しのロイド眼鏡をかけていた。（「基日２」p. 403）

(12)・(13)はそれぞれ話題になる人に対する，話し手の「批判的な気持ち」という「－評価」を示している。

しかし，「バカリ」は，他人のことについて述べられるときも，(14) のような話し手のコトに対する「＋評価」を示す場合がある。

(14)？彼は少しばかり日本語が分かるから，日本へ留学できた。

話題になる人が話し手の身内の人や近い関係にある目下の人の場合には(14)の文は言えるだろう。このときは，話し手は自分のことについて述べるのと同じように，話題になる人のことを述べているのである。これも一種の「語気をやわらかくする」という話し手のコトに対する「＋評価」を示している。

3.2 「限定」を表わす場合

本稿では，「ダケ・バカリ・シカ」が名詞や代名詞について，範囲をそれに限ることを「限定」とする。「限定」を表わす「ダケ」はコトに新しい情報をつけくわえる。例えば，

(15) a．昨日のパーティーには，彼が来た。

b．昨日のパーティーには，彼だけ来た。

(15) a に対して，(15) b は「ほかの人は，昨日のパーティーに来なかった」という情報を与える。この場合の「ダケ」は，客観的にコトを描いている。従って，

(16) a．日本語だけ話していますから，すぐに上手になりますよ。

b．日本語だけ話していますから，英語は上手になりませんよ。

(16) a のような後に「＋評価」のものも，(16) b のような後に「－評価」のものも，両方とも表現可能であると言える。ということは，ここの「ダケ」はコトに「他の言葉を話していない」という情報につけくわえることで，話し手のコトに対する評価をつけくわえていない。これに対して，「限定」を表わす場合の「バカリ」は，話し手のコトに対する「－評価」を示している。そのため，

(17)？a．日本語ばかり話していますから，すぐに上手になりますよ。

b．日本語ばかり話していますから，英語は上手になりませんよ。

(17) a の文は言えるとしても，「日本語を話す」コトに対する「何にもそこまでしなくても」という話し手の「－評価」を示しているようである。このため，(17) a よりは，(17) b の方が自然である。森田（1980）に，「バカリ」について以下のような記述がある。

「おれの人生のまわりの明るさなんぞ，たったこれっ許りだと思っているが……」（堀辰雄『風立ちぬ』）のように「～っぱかり／～っぱかし」と音変化を起こす場合は“軽視”の気持ちが加わる（P. 402）

しかし，収集した用例から見ると，音変化が起こらなくても，「限定」を表わす「バカリ」は，話し手のコトに対する「軽視」のような「－評価」を付け加えることが多いようであ

る。

(18) むしろ学校の勉強そのものが，受験ばかりで無意味になっているのではないでしょうか。(「朝日」1983. 6. 30)

(19) そればかりのことで泣くなんてみっともない。(「外例」p. 815)

(18)・(19)は，いずれも話し手のコトに対する「軽視」という「－評価」を示している。

そして，「シカ」は，「ダケ・バカリ」の構文と違って，常に否定の語と呼応して用いられるために，「－評価」が強くなるのだと思われる。

(20) 「何よ，女のくせに女をわらうことしかできないで……」といきなりわたしはその顔にくってかかりました。「ひとの家へ来て，そこの女房の悪口なんかいう必要ないじゃないの！」(「ソク」p. 225)

(21) 「あら，お父さんには，水が見えますの。わたしには音しか聞こえませんわ」夕起子は棚に寄りかかって背伸びをした。(「青い」p. 15)

(20)・(21)は，いずれも話し手のコトに対する不満という「－評価」を示している。しかし，次のような用例もある。

(22) 女には，どうしても女しかもっていないっていうものがある。(「学国」p. 810)

(23) 富久江にとって，なぎさの重荷は自分の重荷でもあるらしいが，やはりなぎさの重荷は，なぎさ自身しか負うことのできない重荷だと，康郎は兼介の顔を思い浮かべた。(「青い」p. 306)

(22)・(23)にある「シカ」は，(22)女には，男にないものがある，(23)その重荷を負うことのできる人は，なぎさ独りである，のように一見話し手のコトに対する「＋評価」を表わしているようである。しかし，これらの用例は，「いいたくもないのに」，あるいは，「いわなくてもいいのに」という場合に言わされたようなものが多い。あるいは，聞き手を「問いつめる」ような感じをあたえる可能性がある。ここでは，「限定」を表わす「シカ」は，話し手のコトに対する「－評価」を示すと考えたい。

4. 対応する中国語表現の分析

日本語と中国語の多くの教科書類では，「ダケ・バカリ・シカ」と中国語の副詞「只」が対応すると説明されている。しかし，これはあくまでも「意味」の面の対応で，その機能と用法の面においても対応しているとはかぎらない。例えば，先にあげた説明によると，(3)・(4)・(6)の中国語の表現は，いずれも(24)になる。

(24) 只懂一點児日語。

(1)は日本語としてはおかしいが，

(25) 只懂一點児日語，所以很不方便

その中国語訳の(25)は正しい文である。

確かに，意味の面においては，「只」が「ダケ・バカリ・シカ」と同じように程度や限定を表わすのであるが，「只」は，限定される程度や範囲以外のことを排除する。このため，程度を表わす場合の「只」は「非存在を強調する」点においては，「シカ」と対応するが，「ダケ・バカリ」とは対応しない。

このことから，日本語の「ダケ・バカリ・シカ」は，中国語の「只」の一語では対応しきれないことが分かる。

ここで，中国語の「只」はどういうように使われているのかについて考えてみよう。呂淑湘（1980）は「只」について以下のように記述している。

「副」それ以外を除外する

a．動作と関係ある物事を限定する。

b．動作と関係ある物事の数量を限定する。

c．動作及び動作の可能性を限定する。

d．直接名詞の前に置かれて，物事の数量を限定する。

これらの説明から分かるように，「只」は主に日本語の「ダケ・バカリ・シカ」と同じように「程度や限定」を表わす。しかし，「何事かを強く聞き手に印象づけたい」という日本語の取立て助詞の機能は，果たして中国語の「只」にあるのか。あるとしたら，それは日本語の「ダケ．バカリ・シカ」の場合とどう違うのか。

4.1 「程度」を表わす場合

A．数詞を修飾する場合

(26) a．來了三人。

b．只來了三人。

(26) a の「三人来た」という客観的な事実の描写に対して，(20) b は，話し手が来た人数に対して「少ない」という評価をしている。この用法の「只」は「ダケ」と対応していて，「シカ」のように強く話し手のコトに対する「－評価」を伝えてはいない。それを中国語で表わそうとしたら，「只」の代わりに，「才」（わずか）という副詞を使うか，また，文末に「而已」という語気助詞を付けるのが普通だろう。

(27) a．來了三人。

b．才來了三人。

c．只來了三人而已。

また，「只」には，「バカリ」のような「漠然と量をしめす，数字をぼやかす」という用法はないようである。

(28) a．それぞれの家に分宿した七百人ばかりの部隊は，（後略）（「たた」p. 218）

b．分別寄住於老百姓家的大約七百多個人的那個部隊（劉　慕沙訳）

「バカリ」のこの用法は，中国語では，程度副詞や概数を表わす数詞で示す。例えば，(28) a の「バカリ」と対応している中国語は程度副詞「大約」と概数を表わす数詞「多個」である。

B・数詞以外の数量の幅をもつ語を修飾する場合

(29) a．懂一點兒日語。

b．只懂一點児日語。

(29) a の「少し日本語が分かる」というコトに「只」をつけると，その「分かる日本語」の程度が限られているということになる。これは「－評価」を示しているため，「＋評価」とつながるのはおかしい。このため，

(30) *a．只懂一點児日語，所以可以一個人在日本生活。

*b．少ししか日本語が分かりませんから，独りで日本で生活できます。

(30) a の文は，中国語としてはおかしい。(31) a の文も成立しにくい。

(31) *a．他只懂一點児日語，所以可以去日本留学。

*b．彼は少ししか日本語からないから，日本へ留学ができた。

(31) a の文が言える場面を考えてみると，例えば，「今度の奨学金申請は，日本語が分からない人を対象としている。彼の知っている日本語はほんの少しだから，日本へ留学ができた。」といった場合であろう。

このことから，この点においては，「只」は「シカ」と対応していて，「ダケ・バカリ」のようなコトに「＋評価」をあたえる用法はないと考えられる。

4.2 「名詞や代名詞」を限定する場合

「名詞や代名詞」を限定する場合には，「只」は「物事をそれに限る」という用法がある。

(32) a．他會日語。

b．他只會日語。

(32) a の「彼は日本語ができる」に対して，(32) b の場合は「彼は日本語以外の言葉ができない」ということになる。この「只」の「範囲をそれに定める」という用法が「ダケ」と対応している。

(33) a．這些日子的経験使他知道，這些兵的打仗方法和困在屋中的蜜蜂一様只會到處亂撞。(「老文」p. 19)

b．彼の近頃得た経験によると，この兵隊どもの戦争の仕方は，まるで巣箱の中に閉じこめられた蜜蜂のように，急に外へ飛び出すと無茶苦茶に慌てて騒ぎ出し，砲声が聞こえるとキット逃げ出すことにきまっていた。(竹中　伸訳)(下線筆者)

従って，(16) a・b の文は，中国語では「只」を使うことができる。

(16) a．日本語だけ話していますから，すぐに上手になりますよ。

a" 只説日語，所以日語程度馬上便能變得很好喔

b．日本語だけ話していますから，英語は上手になりませんよ。

b" 只説日語，所以英語程度没法變好。

しかし，「バカリ・シカ」にある「－評価」を表わすためには，「只」という言葉だけでは足りない。例えば，

(34) a．夫婦喧嘩をしても，わたしは万吉のところぐらいしか行くところがないのです。(「ソク」p. 218)

b．夫妻吵了架，我所能投奔的，也只有萬吉的家。(劉　慕沙訳)

(34) a の「シカ」の訳語は「只」になっているが，それでは「ダケ」との区別がつかないから，その「シカ」の「もうほかに行くところがない」という「－評価」を示すために，中国語では，(35) b'・b" のように，副詞の併用（いわゆる強調）や語尾助詞を使うことが考えられる。

(35) b' 夫妻吵了架，我所能投奔的，也就只有萬吉的家。

b" 夫妻吵了架，我所能投奔的，也只有萬吉的家而已。

しかし，多くの場合，この「一評価」の意味は訳出されていない。

(36) a．あの人たちにいわせると，世の中に出ている者は，皆，妥協しているが，低俗な連中ばかりだということになってしまいます。(「ソク」p. 218)

b．他們認為那些走紅的作家，要不是向某種什麽妥協了，便是一些低俗的傢伙。

(36) a の文にすでに「低俗な連中」のような話し手のはっきりとした「一評価」があるから，「バカリ」にある話し手が暗に言おうとしている評価を表わそうとする場合は，中国語ではやはり文脈や発音の強弱で示すのが普通であろう。大河内康憲（1977）は，下のように指摘している。

日本語が中国語より話し手の感情表出にこまやかであるとするなら，その一端の，いや一半の理由は係助詞や副助詞の存在にあるのではないかと思われる。副詞や文末助詞で話し手の立場（つまり中国語でいう「語気」）を表現する中国語は，日本語の助詞，助動詞で表出する場合のように幾重にも屈折した表現はむつかしい。（中略）いくつもの語気を一文にになうことがむつかしいのである。(p. 17)（下線筆者）

この助詞や助動詞によって「いくつもの語気を一文中にになうこと」は，大河内の指摘のように，日本語の特色であるとも言えよう。

5. おわりに

以上，取立て助詞の機能という側面から，日本語の「ダケ・バカリ・シカ」と中国語の副詞「只」との対応関係について考察した。「ダケ・バカリ・シカ」と「只」は意味の面においては，対応しているが，機能と用法の面においては，対応していないところがあるため，誤用されることが明らかになった。

しかし，本稿で扱った問題点は，「程度」「限定」を表わす場合にかぎっており，「～ダケアッテ」「～ダケニ」「～バカリデナク」「～タバカリ」「～バカリカ」などの形については触れなかった。また，例えば，同じ数詞についても，助詞との組み合わせで「限定」を表わすことになることがある。

(33) ～何となく二人だけで話したくなったので～。(「現助」p. 65)

(33)は，三人や四人とは話したくないという「程度」の問題ではなく，「ほかの人」と話したくないという「限定」の問題である。これらは今後の課題にしておきたい。

（本稿は，昭和61年1月に提出した筑波大学地域研究研究科の修士論文「日本語の取立て助詞の機能と中国語の相当表現の対照研究―「ダケ・バカリ・シカ」の考察―」に基づいている。指導教官の寺村秀夫教授を初め，草薙裕教授・佐久間まゆみ・堀口純子両講師に多くの御助言を賜った。）

注

1) 「＊」は例文がおかしいことを示す。

2) 「？」は例文がややおかしいことを示す。

用例出典

「朝日新聞」朝日新聞社　「朝日」
『青い棘』三浦綾子（1982）学習研究社　「青い」
『外国人のための基本語用例辞典』陳　三龍編譯（1982）鴻儒堂　「外例」
『学研国語大辞典』　「学国」
『基礎日本語 2』　「基日 2」
『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』　「現助」
『新訂中国語概論』藤堂明保・相原　茂著　「新中」
「ソクラテスの妻」佐藤愛子『文学界』1963 年 6 月号　「ソク」
訳『日本現代小説選』劉　慕沙譯（1975）聯經出版事業公司
「たたかい」三原　誠『文学界』1963 年 3 月号　「たた」
訳　訳者同上
『老舎文集　三』老舎　人民文民出版社（1982）　「老文」
訳『老舎小説全集 5』竹中　伸訳（1981）学習研究社

参考文献

大河内康憲（1977）「副助詞『モ』と副詞『也』など」『日本語と中国語の対照研究』第 2 号　日中対照研究会
金田一春彦・池田弥三郎編（1978）『学研国語大辞典』学習研究社
国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版
高橋太郎（1983 a）「いわゆる副助詞の記述のしかたについて」
……（1983 b）「いわゆる副助詞の記述のしかたについて」（続）
『日語学習与研究』1983 第 1 号・第 2 号
寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味（3）―取立て助詞について―」
『文藝言語研究　言語篇』第 6 巻　筑波大学
……（1985）「『対比』の構文と意味―日本語の場合―」
『日本語と中国語の対照研究　第 10 号』日本語と中国語対照研究学会編
宮田幸一（1948）『日本語文法の輪廓―ローマ字による新体系打立ての試み―』三省堂
森田良行（1980）『基礎日本語 2』角川書店
呂　淑湘（1980）『現代漢語八百詞』商務印書館

（本学地域研究研究科日本語教師養成プログラム昭和 61 年修了，現在文芸・言語研究科研究生）